

ダグール語音韻史の再構成(1)

—語頭の*ɣの摩擦音化について—¹

大竹昌巳

1. 序論

1.1 ダグールについて

ダグール人は、中華人民共和国の内モン自治区フルンボイル市(旧フルンボイル盟)や黒竜江省、新疆ウイグル自治区等に居住する民族集団である。1956年に「達斡爾族」として少数民族の一つに「識別」されており、2010年のセンサスによると民族人口は13万1992人である。ダグール語保持率は不明だが、ダグール語話者の多くは、漢語やモンゴル語等、在地の優勢言語との多言語併用生活を送っている。ダグール語に関しては、正書法は制定されておらず、日常では文字による読み書きは行われない。

ダグール語はモンゴル語族の中で最も東に位置し、他の諸言語・諸方言が失った古風な特徴を保存する一方で独自の改変も多いことから、伝統的に「孤立的諸言語(isolated languages)」の一つに数えられている。過去には北方トゥングース系の言語との接触があったと考えられ、清代の行政言語であった満洲語からの語彙借用も顕著である。

ダグール語の方言区分は四分論が一般的であり、話者人口順にブトハ方言、チチハル方言、ハイラル方言、新疆方言の4方言が区分されている(恩和巴图编著1988: 22-26, 丁石庆1994, 2006: 271-275, 大竹2012: 20-22を参照)。

ダグール人の活動が文献によって知られるのは1620年代以降であり、当時は黒竜江(アムール川)上流およびその支流ジンキリ川(ゼーヤ川)に居住していた(吉田1973, 1974: 8-11, 1984: 30-46)。17世紀半ばの清朝とロシアの相次ぐ黒竜江地域への進出により、ダグール人は清朝の治下に入り、対露対策の一環として、現在の居住地である嫩江(ナウン・ムル)沿岸(この地域の北半のダグール集団をブトハ・ダグール、南半をチチハル・ダグールと呼ぶ)へ移住させられた。当地域から更にフルンボイル地域(この集団をハイラル・ダグールと呼ぶ)や新疆イリ地方(この集団をイリ・ダグール或いは新疆ダグールと呼ぶ)へも一部が移住し、現在の方言グループが形成された。

「ダグール」という名称は、17世紀半ばに清朝の文献ではdaxūrやdagūr²、ロシア文献ではДайпとして現れる。このほか、蒙古語文献*Erdeni-yin Tobči*(『蒙古源流』, 1662年成立)が、チャハル部のトゥメン・ジャサクト・ハーン(在位1558-92)の治世のこととして、<ywyrčyt

¹ 本稿およびこれに続く一連の論考は、筆者が2012年に京都大学に提出した卒業論文「ダグール語音韻史の再構成」を改編し、いくつかの部分に加筆・修正を加えたものである。

² 満洲文字の転写法については註7参照。

n'lykwt, d'kyqwr>の3つの言語的に異なる種族の貢納を伝えている³が、このうち<ywyrčyt> (=Jürčid) は女真であり、<n'lykwt> (=Neligüd) はロシア文献に見えるトゥングース系の種族 Нелюд であるから、<d'kyqwr> (=Dagicur) は地理的にちょうどその間に位置するダグールを指すとみて間違いない。*dagi'ur からは規則的に dagūr を導くことが可能である (MMon. ari'un: Dag. arūŋ 「清潔な」と比較せよ)。

日本では「ダグール」のほか、「ダウール」、「ダフール」、「ダゴール」、「ダオール」、「ダホール」とそれぞれから長音符を除いたもので表記されることもあるが、「ダウ(ー)ル」「ダオ(ー)ル」は母音間の g が弱化して接近音化したブトハ方言形によるもので、現在の漢語表記「達斡爾」もこれに基づく。「ダフ(ー)ル」「ダホ(ー)ル」は満洲語表記に基づくが、文字 x は本来、母音間の有声摩擦音[ɣ]を表記したものであろう。

1.2 資料および先行研究

ダグール語の辞書・語彙集に関しては、これまでにいくつかの著作が編まれたが、恩和巴图等編(1984)が、最も話者人口が多く、標準的方言とされるブトハ方言に拠っていること、収録語彙数が多いこと(熟語・連語含め7400語余り)、対応するモンゴル文語形(や満洲文語形など)が記載されていることから現時点で最良の資料である。本稿では、当語彙集記載の語彙のうち、モンゴル語および満洲語との同源語が明らかなものを資料として用いる。筆者が旧稿を執筆した時期には利用できなかったが、近年上記語彙集の蒙古文語・満洲文語索引である栗林編著(2011)が刊行され、ますます利用の便が図られるようになった。ただし、恩和巴图等編(1984)での文語形の引き当てが必ずしも正しくないことには注意を要する⁴。

本稿では、ダグール語とモンゴル語(あるいは満洲語)との同源語比較により、ダグール語が現在までに経てきた音変化とその条件、音変化間の相対年代を推論する。本稿のダグール語表記は、恩和巴图等編(1984)を一部改めたものを用いる⁵。ブトハ方言以外の方言に言及する場合には適宜ほかの資料も用いる。モンゴル語は中世モンゴル語とモンゴル文語を参照した。中世モンゴル語の資料としては、質・量ともに優れた漢字文献『元朝秘

³ ウルガ本 68r (Haenisch 1955: 67)。

⁴ 一例として、当語彙集は Dag. dəgī 「鳥, 飛禽」に WMon. takiy_a(n) 「鶏」を当てているが、これは実際にはトゥングース系の借用語であり (cf. Sol. dəgī 「id.」), takiya とは無関係である。

⁵ 主な変更点は次の通り。

変更前: a dʒ g, ɣ ni, n ʃ ʃ n# nə# V:

変更後: a j g ni š č ŋ# n# Ṽ

恩和巴图等編(1988)に拠れば、ɣ は g の条件異音であり(120頁)、n は ni の自由異音である(133頁)。ダグール語では語末に短母音が立たない(母音ゼロとの対立を示さない)が、恩和巴图等編(1984)の表記では n の直後のみ語末でも短母音 ə が立つ解釈が取られている。本稿ではこの nə# を n# に改め、恩和巴图等編(1984)の語末の n を ŋ に改めた。例えば原典の xɑ:nə 「哪里」と xɑ:n 「汗, 可汗」は、それぞれ xān と xāŋ と表記する。ここで ŋ で表した音は、恩和巴图等編(1988: 105)に拠れば、語末(ポーズの直前)では鼻母音で実現するものである。

史』のモンゴル語を中心に扱い（ローマ字転写は栗林編著 2009 に基づく）、当資料に見られない語彙は別の漢字文献（栗林編著 2003 ほかに拠る）やパスパ文字文献（Tumurtoogoo ed. 2010 に拠る）、ウイグル文字文献（Tumurtoogoo ed. 2006 に拠る）により補った。モンゴル文語の転写方式については Lessing (1960)に拠ったが、記号を一部改めた⁶。満洲文語の転写については Möllendorff 式の記号を一部改めた⁷。

ダグール語音韻史の研究については N. N. Poppe の貢献が大きい（Poppe 1930, Poppe 1934, Poppe 1955, Poppe 1964）。同じくロシアの Тодаева にも著作がある（Тодаева 1986）。ほかにモンゴル語との比較を扱ったものとして Namacarai & Qaserdeni (1983)や恩和巴图编著（1988）がある。一部の音変化については佐藤（1985）や角道（1987）、栗林（1993）等が詳しく扱っているが、ほとんどの音変化は条件等に関して十分な検討がなされてこなかった。なお、大竹（2012: 28-34）では多くの音変化についてまとめてある。

1.3 ダグール語の音韻体系

以下では、主として恩和巴图编著（1988）に基づきブトハ方言の音韻体系について略述する。他方言の音韻に関しては、恩和巴图编著（1988: 23-26）、丁石庆（2006: 276-302, 2008）、大竹（2012: 22-25）を参照されたい。

1.3.1 母音音素

固有語に現れる単母音は次の 6 種類で、長短の区別がある。

ĩ			ũ
	ě	ǎ	ǒ
		ǣ	

二重母音には、-i を音節副音とする下降二重母音 ai, əi, oi, ui と、-u を副音とする au, əu が
ある。

なお、非初頭音節に立ちうる短母音は、音色が曖昧な弱化母音のみである。恩和巴图等
編（1984）では、原則として非弱化母音 ǎ, ǣ, ĩ, ě に後続する弱化母音は ə で表記され、ǒ, ũ に
後続する弱化母音は u で表記される。ただし、口蓋化子音（後述）の直後の弱化母音は i
で、唇音化子音（後述）の直後の弱化母音は u で表記される。これらはいくまでも「表記」
であって、同じ文字が使用されていても、それらの実際の音価は環境によりかなり異なる
ことがある（特に u で表記される音）。

⁶ c, j, ø, x, y, z, γ を č, y, ö, q, ü, j, g に改めた。

⁷ c, h, j, ũ を č, x, j, ũ に改めた。また、音節末の閉鎖音は、ダグール語での現れその他を考慮し、b, t, k では
なく b, d, g で表記する。

1.3.2 子音音素

固有語に現れる単純子音は次の 18 種類である。

	Labial	Alveolar	(Alveolo-) palatal	Velar
Fortis stops	p	t	č	k
Lenis stops	b	d	ǰ	g
Fricatives		s	š	x
Nasals	m	n		ŋ
Trills		r		
Laterals		l		
Approximants	w		j	

破裂音と破擦音を併せて閉鎖子音 (stop consonants) と呼ぶ。閉鎖子音には硬音 (fortes) と軟音 (lenes) の対立があり、ふつう硬音は無声有気音、軟音は無声無気音とされるが、例えば一般的な漢語の有気音／無気音の対立とは聴覚印象が異なる。軟音は有声音間で有声音化し、b, g は語頭および同器官的な鼻音の直後を除いて摩擦音化することが多い。

ŋ で表記する音はポーズの前では鼻母音 (ないし口蓋垂附近の鼻音) で実現し、同器官的な子音の直前で m, n, ŋ で表記される音と併せ、調音点未指定の 1 つの鼻音音素/N/と解釈される。この音素は母音で始まる語尾が後続すると n となる。

上記の単純子音のほか、口蓋化子音と唇音化子音を有するのがダグール語の特徴である。口蓋化子音は対応する単純子音の右肩に j を附し、唇音化子音は w を附して表記する。

1.3.3 音節構造

音節内部は(C)V(C)(C)という構造をなす。すなわち、母音以外は任意的要素であり、頭子音は単子音のみ、末子音は二子音連続までが許容される。最小語は 2 モーラであるという制約があるため、開音節の単音節語では V は長母音あるいは二重母音でなければならない。音節末で可能な子音連続は、主に、(i) 共鳴音または軟音 b, g を前部要素、硬音または軟音 d, j を後部要素とする場合 (例: ort, kimč, kabč, olj), (ii) 同器官的な鼻音を前部要素とする場合 (例: nəmb-, mʲaŋg), (iii) šk および šk^w (例: g^wašk, tašk^w), (vi) 流音 r, l を前部要素、口蓋化子音 bj, kj, gj または唇音化子音 k^w, g^w を後部要素とする場合 (例: argj, gulg^w), (v) 同子音連続 (例: tann, xoll (~xorul)) に分類される。

1.3.4 超分節素

ダグール語はアクセントが語の弁別に関与しない固定アクセント言語である。強さは音韻語の初頭音節が卓立し、高さは末音節が卓立する。

2. 語頭*čの摩擦音化

2.1 正則である例

管見ではこの音変化を初めて指摘したのは Pomme (1930)であり、「*čについては、多くの場合に、*iの前の位置でsになったことに注目すべきである」(131頁)と述べ、のちに Poppe (1964)で「*iの前では語頭の*čが多くの語幹でsになった」(140頁、圏点は引用者による)と多少より正確な表現に修正された。

この音変化が見られる例として、次の13語が確認される(明らかな派生語は除く。以下同様)。

(1) Dag.	MMon. ⁸	WMon.	gloss
šabgəñč	—	čibaganča, simnanča	未出嫁的女人
šad- ⁹	čida-	čida-	能
šan- ¹⁰	čina-	čina-	煮, 熬
šannəg	—	čindag_a(n)	大白兔
šaŋgā-	—	čingcaga-	紧经子
šar	čirai	čirai	脸面, 面孔
šī	či	či	你(主格)
šamār	čimadača	čim_a-ača / čim_a-bar	(šī的界限格、凭借格)
šamd	čimada, čimaṭur	čim_a-du	(šī的与位格)
šamī	čimayi	čim_a-yi	(šī的宾格)
šamtī	čimalu'a	čim_a-tai	(šī的共同格)
šinī ¹¹	činu	čin-u	(šī的领格)
šidər	—	čidür	马绊
šil-	čile-	čile-	疲乏
šiməg	čimegen [HY]	čimüge(n)	骨髓
šolbōr	čilbur	čilbugur, čulbugur	偏缠
šor-	čir-	čir-, sire-	拉, 拖
šurkul	čitkōr [HY]	čidkür	鬼

⁸ 中世モンゴル語形は『元朝秘史』に拠る場合は出典を示さず、その他の文献に拠る場合は[]内に略号によって出典を示した。

⁹ この常用語はなぜか恩和巴图等編(1984)には記載されていないため、恩和巴图编著(1988)により補った。なお、恩和巴图等編(1984)にもその派生語 Dag. šadəl; WMon. čidal「本领, 才能」は記載されている。

¹⁰ ただし恩和巴图等編(1984)は幼児語として Dag. čan-も載せる。

¹¹ 恩和巴图等編(1984)には記載されていないが、恩和巴图编著(1988)により補う。

上の多くの語で「*i の折れ」と呼ばれる母音の逆行同化現象が生じているため、現代ダグール語では「*i の前」という環境は破壊されているが、中世モンゴル語・文語形に拠って、先ダグール語 (Pre-Dagur language) ¹²においてはこれらの語の初頭音節の母音として*iを再構できる¹³。「*i の前」という条件が必要であることは、次のような (疑似) 最小対からも明らかである。

(2) Dag.	MMon.	WMon.	gloss
šad-	čida-	čida-	能
čad-	čad-	čad-	飽
šī	či	či	你
čū	—	čū	闫, 插关儿

ただし、次のような語が1例ある。

(3) Dag.	MMon.	WMon.	gloss
šolg ^w	—	čulgui	带皮的 (米、粮)

1つの可能性として PDag. *čilgu(i)を立てることもできるが、語末の *i* 二重母音 (の*-i) が脱落する例は名詞に限られ、形容詞においては脱落しない (続稿で述べる) ため、そもそも両者が同源語でない可能性がある。

この摩擦音化が*iの折れに先行することは言うまでもない。もしも*iの折れが*čの摩擦音化に先行して生じたとすると、正しい語形を導けない。

(4) 先ダ語	*čida-	*čida-
	↓ ①*i の折れ	↓ ①*č 摩擦音化
	*čada-	*šida-
	↓ ②*č 摩擦音化 (不適用)	↓ ②*i の折れ
	*čada-	*šada-
	↓ (母音弱化)	↓ (母音弱化)
	*čadə-	*šadə-
	↓ (音節改変)	↓ (音節改変)
現代ダ語	†čad- ¹⁴	šad-

¹² ダグール語において諸変化が生じる前の最古の段階を先ダグール語期と呼ぶことにする。

¹³ (1)の Dag. šor- と MMon. čir-が同源語であるならば、*čir- > šor-という音変化は不規則的である。

¹⁴ 現代語として正しくない語形にはダガーを附す。

2.2 例外に見える例

Poppe が「多くの場合に」と曖昧にしているように、実際には**i*の前にもかかわらず語頭の**č*が摩擦音化していない語例が9例存在する。

(5) Dag.	MMon.	WMon.	gloss
čikəl-	—	čigle-	指名, 点名
čikʲ	čiki(n)	čiki(n)	耳朵
čiki-	—	čiki-	塞, 填入
činā	činege(n), čenege(n) [Ui]	činege(n)	力量
čolō	čilawun	čilagu(n)	石头
čos	čisu(n)	čisu(n)	血
čuč-	čüčü- ¹⁵	čiči-, čeči-, seči-	戮
čulā	čilüge [Ui]	čilüge(n)	闲, 闲的
čulmā niškʷə	čurama ničügün	čiram_a ničügün	光身子

このうち Dag. čuč-と Dag. čulmā は初頭音節の母音が *u* であるが、これは **i* の折れとは考えられず、中世語の čüčü-, čurama を考慮すれば、先ダグール語における両者の初頭音節の母音は **i* ではなくそれぞれ **ü*, **u* であったと考えられる。

残りの7例について、摩擦音化が阻害された条件について検討する。

まず注目されるのは、(5)で Dag. činā, čolō, čulā と第二音節に長母音が含まれている場合に摩擦音化が生じていないことである。(1)の中にも Dag. šaŋgā-, šolbōr のように第二音節に長母音をもつ語があるが、初頭音節が、前三者は開音節であるのに対し、後二者は閉音節である。また、šī (二人称単数) の斜格のうち šamār (奪格・造格), šamī (対格), šinī (属格) は初頭音節が開音節で第二音節に長母音が含まれるが、音変化は語幹と語尾とは独立に行われるために摩擦音化が阻止されなかったと考えられる(奪格・造格と対格の語幹は PDag. **čima-* > Dag. šam-, 属格の語幹は PDag. **čin-* > Dag. šin-)。

(5)の残り4例は Dag. čikəl- (< **čikele-*?), čikʲ (< **čiki*), čiki- (< **čiki-*), čos (< **čisu*) とかつての第二音節の頭子音が硬音¹⁶であることが注目される。(1)でも Dag. šurkul (< **čidkōr*) においては第二音節が硬音であるが、やはり初頭音節が、前四者は開音節で、後者は閉音節である。

¹⁵ 『秘史』12巻§272の「出出周《指著》」は、栗林編著(2009)では čuču=jü と転写されているが、Dag. čuč- を考慮すると čüčü=jü と転写すべきと思われる。

¹⁶ 閉鎖子音 *p, t, č, k* だけでなく摩擦音 *s, š, x* も硬音に含めてよいことは、多くの音変化や共時的現象が示している。

2.3 小結

以上より、語頭の*čの摩擦音化の条件は次のようにまとめられる。

- (6) 初頭音節が開音節で、かつ、第二音節の母音が重い母音または頭子音が硬音の場合を除いて、*iの前の語頭の硬音閉鎖子音*čは摩擦音çになった。

重い母音 (heavy vowel) とは、長母音と二重母音の併称で、両者は同様のふるまいをするためにまとめることが可能である。実際、摩擦音化が生じた段階で Dag. čolō「石」の語形が*čilauであったか、*čilūまたはčilōであったかは決定できない。ただし、この段階で母音縮合 (例: PDag. *čila'u > *čilau ~ *čilū) が生じていたことは明らかである。また、前述の如くこの音変化は*iの折れに先行する。

重い母音を含む音節と硬音を頭子音とする音節とは、ともに「強い音節」である。*iの前の*čの摩擦音化は弱化現象の一種であるが、「強い音節」が後続する場合にはこの弱化が阻止され、*čが保存されたものと思われる。

ちなみに近隣の言語では、モンゴル語ホルチン方言とバルグ=ブリヤート方言において破擦音*čの摩擦音化が見られるが、*iの前に限らず、また語頭にも限らず、すべての*čが摩擦音化する。またブリヤート語では*čだけでなく*çも摩擦音化する。これらの破擦音の摩擦音化が東部地域に集中していることは注目されるが、これとダグール語のそれとの関係は明らかでない。

2.4 余論

前節で得られた音変化を阻止する条件の自然性は、さまざまな例から確認される。

最も興味深いのは、モンゴル語チャハル方言における語頭硬音の軟音化である。

(7)	Chakh.	MMon.	WMon.	gloss	Chakh.	MMon.	WMon.	gloss
	jas(āŋ)	času(n)	času(n)	雪	cf. čaas(āŋ)	ča'alsun	čagasu(n)	紙
	garčgeε	qarčiqai	qarčacai	鷹	cf. xεεč(īŋ)	qayyiči[HY]	qayiči(n)	鋏
	gabtās	qa[b]tasun	qabtasu(n)	板	cf. xamt	qamtu	qamtu	共に

この音変化は、第二音節頭の硬音*t, *s, *č, *š, *k/qが引き金となって、語頭の硬音*t, *č, *k/qが対応する軟音d, j, gに変化する異化現象である。この軟音化は、初頭音節に重い母音または母音+鼻音がある場合には阻止される (栗林 1989: 1429)。

上記音変化をはじめとしてモンゴル系諸言語の音変化においては、硬音というクラスが重要な役割を果たすことが多い (ただしチャハル方言の軟音化とダグール語の*č摩擦音化においては硬音の果たす役割が異なる)。また、上例のように重い母音は母音+鼻音とともに

に1つのクラスを形成することがある。ダグール語の*ɬ 摩擦音化においては例がないためにそのことを確認することができないが、その可能性は否定できない。

3. 附——満洲語由来の借用語における音変化

ダグール人は17世紀半ばに清朝に帰属し、八旗制に組み込まれた。清朝治下では満洲語が行政言語とされ、ダグール人子弟の間でも満洲語・満洲文字が広く学ばれたため、ダグール語には満洲語の語彙が多く流入した。この借用の時期はかなり限定されるため、満洲語由来の借用語にどのような音変化が生じたかを調べることで、ダグール語の音変化の相対年代を明らかにし、さらにはその絶対年代をも特定することができる。ここでは、個々の音変化の詳細には触れずに、それが満洲借用語で生じているか否かを検討する。

例えば、*i の折れは満洲借用語でも規則的に生じている。二、三例を挙げると、

(8) Dag.	gloss	WMan.	Man. ¹⁷	gloss
jaləŋ bē	三月（多指历阴）	< ilan biya	i'lan bia(:)	id.
n'iakəŋ	汉人，汉族	< nikan	ni'χan ~ niɑ'χan	id.
šar-	世袭，继承，接班	< sira-	çi'ra:me	id.

また、*i の折れと並行的な「円唇母音の折れ」（栗林 1993 参照）も規則的に生じている。

(9) Dag.	gloss	WMan.	Man.	gloss
bat-	猎获，捕获	< buta-	bu'ta:me	id.
d'wāŋg	西瓜	< dungga	duŋ'ŋa ~ duŋ'ŋa	id.
wašig	准星	< usixa	uš'ɬa:	星

このほか、音節末の阻害音が r になるロータシズムが、*g のみに見られる。

(10) Dag.	gloss	WMan.	Man.	gloss
ort	火药	< ogto	'ɔgtɔ	薬
pərš-	闹腾，扰乱	< fegsi-	fuuk'šume	走る
tors	村镇	< togso	'tɔgsɔ ~ 'tɔ:gsɔ	id.

一方、語頭の*ɬ の摩擦音化は生じていない。

¹⁷ 参考のため、清格尔泰（1982）に拠って満洲口語（三家子方言）も掲げる。

(11) Dag.	gloss	WMan.	Man.	gloss
čonkuŋ	口红, 朱砂	< činuhũn	—	朱
čiktāŋ	天干	< čigtan, čigten	tɕiq'tuun	幹, id.

以上より, ここで取り上げた音変化を次の2類に分けることができる。

- (i) 語頭*čの摩擦音化
- (ii) *iの折れ, 円唇母音の折れ, ロータリズム

(i)は, 満洲借用語がダグール語の語彙体系に定着した時期にはすでに完了していたために, それらの語彙には生じなかった変化であり, (ii)は, 当時進行中であったか, まだ生じていなかったために, それらの語彙が蒙った変化である。すなわち, (i)の音変化は(ii)の諸変化より先に完了した。

ところでブトハ地区からフルンボイル地域へのダグール人の移住は雍正 10 (1732) 年, 新疆地域への移住は乾隆 28 (1763) 年であり (満都尔图主编 2007: 123), ハイラル方言・新疆方言でも満洲借用語に(ii)の音変化が見られるので, 18世紀半ばまでには満洲借用語が定着しており, (ii)の変化は少なくともすでに始まっていた蓋然性が高い。

略号

【言語】

Chakh.	Chakhar	モンゴル語チャハル方言
Dag.	Dagur	ダグール語 (ブトハ方言)
Man.	Manchu	満洲語 (三家子方言)
MMon.	Middle Mongolian	中世モンゴル語
PDag.	Pre-Dagur	先ダグール語
Sol.	Solon	ソロン語
WMan.	Written Manchu	満洲文語
WMon.	Written Mongolian	モンゴル文語

【文献】

HY	<i>Huayi Yiyu</i>	『華夷訳語』(甲種本)
Ui	Uighur-Mongolian monuments	Tumurtoogo (2006)所収ウイグル文字諸文献

参考文献

【和文】

大竹昌巳 (2012) 「ダグール語の音韻 —— 共時的記述と通時的記述 ——」 『地球研言語記』

述論集』第4号, 13-44

角道正佳 (1987) 「ダグール語南屯方言の特徴」『大阪外国語大学学報』74(1/2), 1-18

栗林均 (1989) 「内蒙古語」『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』(亀井孝・河野六郎・千野栄一編, 東京:三省堂) pp. 1427-1434

—— (1993) 「音声変化の規則性とその例外 —ダグール語における円唇母音の「折れ」—」『日本大学人文科学研究所研究紀要』第45号, 37-63

栗林均編著 (2003) 『『華夷訳語』(甲種本) モンゴル語全単語・語尾索引』仙台: 東北大学東北アジア研究センター

—— (2009) 『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』仙台: 東北大学東北アジア研究センター

—— (2011) 『『達斡爾語詞彙』蒙古文語索引 附: 満洲文語索引』仙台: 東北大学東北アジア研究センター

佐藤暢治 (1985) 「ダグール方言の母音変化」『モンゴル研究』(モンゴル研究会) 8号, 111-118

吉田金一 (1973) 「十七世紀中ごろの黒竜江流域の原住民について」『史学雑誌』第82編第9号, 29-49

—— (1974) 『近代露清関係史』東京: 近藤出版社

—— (1984) 『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』東京: 近代中国研究センター

【中文】

丁石庆 (1994) 《达斡尔语方言成因试析》, 《齐齐哈尔师范学院学报》1994年第3期, 73-76, 82

—— (2006) 《双语族群语言文化的调适与重构——达斡尔族个案研究》北京: 中央民族大学出版社

—— (2008) 《达斡尔语简志 方言》, 《中国少数民族语言简志丛书 修订本 第六卷》孙宏开主编, 北京: 民族出版社, pp. 301-313

恩和巴图编著 (1988) 《达斡尔语和蒙古语》呼和浩特: 内蒙古人民出版社

恩和巴图等编 (1984) 《达斡尔语词汇》呼和浩特: 内蒙古人民出版社

满都尔图主编 (2007) 《达斡尔族百科词典》呼伦贝尔: 内蒙古文化出版社

清格尔泰 (1982) 《满洲语口语语音》《内蒙古学报 (哲学社会科学版)》纪念校庆 25 周年专刊 (载: 《清格尔泰民族研究文集》北京: 民族出版社, 1997年, pp. 232-355)

【蒙文】

Namcarai & Qaserdeni (1983) *Dagur kele Monggul kelen-ü qaričagulun*. Köke-qota: Öbür Monggul-un arad-un keblel-ün qoriy_a.

【英独文】

Haenisch, Erich (1955) *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen)*. Berlin: Akademie-Verlag.

Lessing, Ferdinand D., ed. (1960) *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley; Los Angeles: University of California Press.

Poppe, Nicholas (1955¹ 1987²) *Introduction to Mongolian Comparative Studies*. Helsinki: Suomalais-ugrilainen Seura.

Poppe, Nikolaus (1934) “Über die Sprache der Daguren”, *Asia Major* 10. 1-32, 183-220.

——— (1964) “Die Dagurische Sprache”. in: mit Beiträgen von Nikolaus Poppe, et al. *Mongolistik*. Leiden; Köln: E. J. Brill. S. 137-142.

Tumurtogoo, D., ed. (2006) *Mongolian Monuments in Uighur-Mongolian Script (XIII-XVI centuries): Introduction, Transcription and Bibliography*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.

——— (2010) *Mongolian Monuments in 'Phags-pa Script: Introduction, Transliteration, Transcription and Bibliography*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.

【露文】

Поппе, Н. Н. (1930) «Дагурское наречие» Ленинград: Изд-во АН СССР.

Тодаева, Б. Х. (1986) «Дагурский язык» Москва: Наука.

Reconstruction of the Phonological History of the Dagur Language (1)

—Spirantization of Word-initial *č—

ŌTAKE Masami

Abstract

In the Dagur language, one of the ‘isolated’ languages in Mongolic, one observes spirantization of *č in initial position before *i first noted by N. N. Poppe in 1930. This paper attempts to determine the strict condition where it occurred and the relative order among related sound changes. In conclusion, it was revealed that:

(i) the fortis affricate *č in initial position before *i became š except for the cases where the first syllable was open and the second syllable’s vowel was heavy or where the first syllable was open and the second syllable’s onset was fortis,

and that:

(ii) the above change occurred later than vowel contraction (*V’V > VV) and earlier than palatal breaking (*Ci...V > C’V...V).